

【ポスター発表】

福祉系大学生の障がい者理解について

—調査方法の検討—

○ 金城大学 岡村 綾子 (003446)

キーワード：集合調査, 留置き調査, 比較

1. 研究目的

障がい者に対する態度の研究は、これまで多数の研究がある。精神障がいについては、住民を対象としたもの、市民・家族・有識者・専門従事者の態度を比較したもの、看護の学生を対象したものなど¹⁾が挙げられる。知的障がいについては、小学生、中学生、大学生や一般社会人を対象としたものなど²⁾が挙げられる。身体障がいについては、大学生や一般社会人を対象としたもの、児童・肢体不自由児・大学生の態度を比較したものなど³⁾が挙げられる。障がい別でなく全障がいに対する態度についての研究は、小学生や大学生を対象としたものなど⁴⁾が挙げられる。

障がい者に対する態度が障がい者にふれることによる変化について、生川の研究⁵⁾などをはじめとして、交流経験やボランティア活動、実習などを通して障がい者とふれることで障がい者に対する態度に変化がみられる報告が多数みられる。これらの報告のほとんどが集合調査による所見である。

筆者もこれまでボランティア活動や実習を通して障がい者と関わることにより障がい者理解が進むと指摘してきた。これらの研究では1年生から4年生までを各学年集団として扱い、約20年間にわたり継続的に調査を実施してきた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で集団的行動を避けるために、ここ2年間は集合調査を実施することが出来ず、留置き調査に切り替えざるをえなかった。そこで、集合調査と留置き調査とそれぞれで得られた調査の結果を比較することにした。

2. 研究の視点および方法

1) 調査対象者 A福祉系大学の2019年度1年生116人、2020年度1年生104人、2021年度1年生121人を対象とした。

2) 調査内容 障がい者に対する読書の有無、障がい者に関する映画やビデオ等の視聴の有無、一般的な問いかけによる障がい者に対する態度などとした。

3) 調査手順と調査用紙の回収 2019年度は、後期のオリエンテーションの機会を利用して質問用紙を配布し、自記式集合調査を行った。2020年度と2021年度は、2019年度と同様に後期のオリエンテーション時に質問用紙を配布し、留置き調査を行った。質問紙調査用紙については、2019年度は116人に配布し、106人から回収でき(回収率91.4%)、2020年度は104人に配布し、74人から回収でき(回収率71.2%)、2021年度は121人に配布し、77人から回収できた(回収率63.6%)。有効回答数は、2019年度100人(有効回答率86.2%)、

2020年度61人（有効回答率58.7%）、2021年度52人（有効回答率43.0%）であった。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理規程を厳守し実施した。調査対象者には、研究の趣旨や得られたデータは研究目的以外には使用しないこと、調査結果の検討・分析に際して個人が特定できないように配慮することを説明後、調査への参加を要請し、調査参加をもって研究協力受諾とした。本研究は金城大学研究倫理委員会の承認（第2019-06）を得た。

4. 研究結果

集合調査の回収率は9割前後、有効回答率は少なくとも7割前後であった。留置き調査では、回収率は7割前後で、有効回答率は5割前後であった。調査内容として一般的な問いかげによる障がい者に対する態度は、集合調査では、入学前には「偏見をもっていた」が25%前後、「差別してきた」が10%以上であったのが、入学後にはいずれも5%前後に減少していた。留置き調査では、入学前には「偏見をもっていた」が25%弱、「差別してきた」が10%強であったのが、入学後には「偏見をもっている」が10%弱、「差別している」が15%弱という結果の年度や、入学前には「偏見をもっていた」が10%強、「差別してきた」が5%弱であったのが、入学後には「偏見をもっている」「差別している」どちらも0%という結果の年度があった。

5. 考察

新型コロナ感染防止のために集合調査が行えないため留置き調査を実施せざるをえなかった。そこで目的に示したように集合調査と留置き調査によるそれぞれの結果を比較することを試みた。集合調査は回収率と有効回答率が留置き調査よりも高かった。留置き調査においてデータのバラつきが見られたことについては、真摯に回答する学生が質問事項に対して率直に回答していると考えられる。両調査には一長一短があると指摘でき、研究の目的に応じた使い分けについて、今後、検討する必要がある。

文献

- 1) 伊東由賀・山崎美晴・永利美花・山村礎（2005）精神障害に対する看護学生の態度の変化．日本保健科学学会誌，7（4），241－249.
- 2) 大谷博俊（2002）知的障害児（者）に対する健常者の態度に関する研究—大学生の態度と交流経験・接触経験との関連を中心に—．特殊教育学研究，40（2），215－222.
- 3) 河内清彦（1990）肢体不自由者（児）に対する大学生の態度構造とその形成要因としての先行学科及び性別の役割について．特殊教育学研究，28（3），25－35.
- 4) 渡邊照美・青山芳文・稲富まどか（2016）障害児・者との接触経験の時期及び内容と障害児・者に対する態度との関連について．佛教大学教職支援センター紀要，7，11－28.
- 5) 生川善雄（1995）精神遅滞児（者）に対する健常者の態度に関する多次元的研究—態度と接触経験，性，知識との関係—．特殊教育学研究，32（4），11－9.